

<銃を手にして… ウガンダの子ども兵>

(1) 元少女兵の告白 命奪う引き金、軽かった

アフリカ東部ウガンダの首都カンパラから車で五時間。北部最大の街グルは、赤土がむき出しで、ほとんどの家に電気、ガス、水道がない。薄暗い部屋に陽光が差し込むと、ビッキー(32)のガラスの義眼が一瞬、光った。「政府軍の銃弾が首から入り右目を貫通した。二発目はあごに残った」。北部民族アチョリ人の反政府組織「神の抵抗軍」(LRA)の兵士として政府軍と戦っていたビッキーは、このケガで「戦力外」となり、2008年に解放された。

LRAは1990年代半ばから約10年間で推定3万8千人の子どもを拉致し、戦闘員や性奴隷として使った。ビッキーが拉致されたのは15歳の時。すぐに、40歳ほどの司令官と結婚させられた。「生きるために従った。下品で慈悲のない男だった。今も、憎い」

約30人の部隊で密林を絶えず移動、自動小銃を手に政府軍と交戦した。やがて身ごもり、年上の女性兵士に助けられながら、密林の中で男児二人を産んだ。

拉致から一年半後、16歳と13歳の少女が部隊から脱走を試みた。兵士は二人を連れ戻すと、全員の前でその手足を縛り上げ、ビッキーに処刑を命じた。

「私がとてもおびえていたので、兵士は私を選んだ。やるしかなかった。二人の頭を撃った。銃はとても重かったが、引き金は軽かった」

消え入りそうな声で話すアチョリ語は、ポロポロと鳴る民族楽器の音色のように美しく、語られる惨劇とのギャップに戸惑った。(敬称略)

◆10代、戦場で過ごした

ウガンダの反政府組織「神の抵抗軍」(LRA)は、旧ソ連開発の自動小銃AK47(通称カラシニコフ)を好んだ。グルの街で、カラシニコフを手にとった。持ち主の男は「古いが、丈夫な銃だ。パーツを分解し組み立てられれば、一日の訓練で扱えるようになる」と、事もなげに言う。

全長約一メートルのねずみ色の銃は、ずしりと重かった。30発入りの弾倉を付けた重さは約五キロ。水平に構えるだけで手が震える。弾倉を外し、引き金を引いた。今度はその、おもちゃのような軽さにぞっとした。人さし指一本で簡単に人が殺せる。だから、LRAはこの銃を子どもに手渡した。

アレックス(32)は8歳でLRAに拉致され、10歳で戦場に立った。「初めて銃を持たされた日、密林の切れ目で戦闘が始まった。敵の姿は見え、泣き声と銃声しか聞こえなかった。銃は重くて、一発も撃てないまま右足を撃たれた」

12歳の時、一カ月の戦闘で300人以上の遺体を見た。「自分が誰かを殺したかどうか分からない。殺さなければ殺される、殺せ、とだけ教えられた」。13歳で左脇腹を撃たれた。「7カ月間、山に身を潜め、薬がないので湯をかけた」



戦場で右目を失ったビッキーが過去を語る間、昨年恋人との間に生まれた長女は母乳を求め続けた



「神の抵抗軍」に拘束された15年間、数え切れない銃弾を浴びたアレックス(中央)は大工を目指し訓練に励む

14歳で政府軍の大規模な掃討作戦に遭う。「ヘリから投下された爆弾が花火のようにはじけた」。上の歯8本が飛び、舌が真っ二つに割れた。爆弾の破片が体中に刺さり、服が吹き飛び、真っ裸で倒れた。部隊は壊滅していた。

「一人、取り残された」。話しながら、冷静だったアレックスの様子が変わっていた。両手を広げ、充血した目を見開き、アチョリ語で訴え続ける。目が合っている気がしなかった。そこには、当時の戦場が映っていたに違いない。



ウガンダ北部最大の街グルの中心部

「トマトを見つけ、はって行き、傷に搾り汁をかけ、食べた。腐り始めた遺体の隣で、自分もいずれこうなると悟った。神に、もし私が罪を犯したなら許してくださいと祈り、泣いた」

2009年までの拘束中、さらに左半身の3カ所を撃たれ、右目を失明した。その間、LRAと政府の和平交渉の場に立ち会ったことがある。仲介にあたったモザンビークのシサノ元大統領は、傷だらけのアレックスを見て「なぜ子どもを兵士にするのか」とLRA幹部に尋ねた。幹部は答えた。「子ども兵は大人よりも勇敢だからだ」（敬称略、ウガンダ北部グルで、沢田千秋、写真も）

アフリカでは今も、多くの子どもが兵士として戦場に駆り立てられている。ウガンダで銃を手に戦い、生還した元子ども兵の姿を追った。（ウガンダ北部グルで、沢田千秋、写真も）

◆子ども兵世界に30万人

戦場に立つ「子ども兵」（18歳未満）について、国連は世界で三十万人と推計する。2018年5月の報告書では、14カ国で政府軍を含む延べ65組織が子ども兵を使っていると公表。中央アフリカなどで活動を続ける「神の抵抗軍(LRA)」のほか、ナイジェリアのイスラム過激派「ボコ・ハラム」、過激派組織「イスラム国」(IS)などを挙げた。この時点で、ウガンダ内の組織の活動は確認されていない。

ウガンダやコンゴ(旧ザイール)で帰還した元子ども兵を支援する日本のNPO「テラ・ルネッサンス」によると、子どもを拉致した組織は、殺人の強要や拷問、薬物などで服従を強いる。スパイや前線での弾よけ、地雷探知や荷物運びに使い、死んだら再び調達する「消耗品」のように扱うという。少女には強制結婚や性的虐待を強いている。

子ども兵には、無理やり連れ去られるほか、貧困などにより自ら志願する場合もあるが、健やかに育ち、教育を受ける権利を失っていることに変わりはない。

子ども兵		使用している国と組織の数
中東	シリア	7(1)
	イエメン	5(1)
	イラク	2(1)
アフリカ	コンゴ(旧ザイール)	14
	南スーダン	4(1)
	スーダン	4
	マリ	4
	ソマリア	3(1)
	中央アフリカ	3
	ナイジェリア	2
アジア	ミャンマー	8(1)
	アフガニスタン	5(1)
	フィリピン	3
中南米	コロンビア	1

※かっこ内は政府軍。出典:2018年の国連報告書「子どもと紛争」

国連は2000年、18歳未満の紛争への参加、強制徴兵を禁止する「子どもの権利条約」選択議定書を採択。日本を含む167カ国が批准している。（沢田千秋）

<ウガンダと反政府軍> ウガンダは、植民地時代の英国の分断統治の影響を受け、1962年の独立後も、南北の民族の一方が政権を取ると、他方が反乱軍となる内戦を繰り返した。86年に誕生した南部出身のムセベニ政権下で、北部アチョリ人の虐殺が続く中、90年前後、霊媒師を名乗るジョゼフ・コニー指導者がアチョリの勢力回復を掲げ「神の抵抗軍」(LRA)を結成。ムセベニ政権はLRA制圧に同胞のアチョリ人を起用する一方、LRAは4万人近いアチョリ人の子どもを拉致し、2006年に同政権と停戦合意後も近隣国で活動が続いている。



<銃を手にして… ウガンダの子ども兵>

(2) 民族分断の果て 拘束13年 家族からも「裏切り者」

ウガンダ北部最大の町グルから、車で数分も走ると、辺りは低木のブッシュと呼ばれる茂みが広がる。点在する民家は、干し草の屋根に土壁の伝統的家屋「ハット」だ。南部の首都カンバラ出身の運転手は「北部のアチョリ人はわれわれよりも肌の色が濃く手足が長い」と、「違い」を強調する。この国では長年、南北民族が内戦を繰り返し、政権を奪い合ってきた。

アチョリ人の反政府組織「神の抵抗軍」(LRA)が1990年前後に蜂起した目的は、南部出身のムセベニ政権打倒と北部アチョリ人の結集だった。ムセベニ政権はあえて、制圧軍にアチョリ人を起用し、民族分断を図った。LRAは政府に加担した村人を「汚れたアチョリ人」とさげすみ、虐殺、強奪を始める。見せしめに鼻や耳、唇をそぎ、拉致した少年兵には母親の腕を切り落とすよう命じた。

大統領の思惑通り、アチョリ人の憎悪は政府ではなくLRAに向いた。同胞の支持を失ったLRAは戦力確保のため、次々と子どもの拉致を敢行。村人の憎しみは増幅し、LRAと行動を共にした元子ども兵も同罪視するようになった。

小さな集落にあるロナルド(31)の自宅はタン屋根にコンクリート壁。周囲のハットに比べ不自然なほど立派だった。LRAの拘束は10歳から13年間に及んだ。2010年の解放時、頭と左腕に銃弾が残り、後遺症に苦しむロナルドのため、欧米の支援団体が、この家を建てた。

皮肉にも、この大きな家は憎悪と嫉妬の象徴になった。命からがら帰ってきたロナルドを、家族や村人は「裏切り者」と呼んだ。祖母は、この家にLRAの指導者「コニー」の名を付けて嫌悪し、建設中、親族に壁を壊させた。父親はロナルドが死んだと決め付け、彼が受け継ぐはずだった耕作地を処分していた。

「たとえアチョリ人だろうが、LRAへの恨みと怒りは言い尽くせない。彼らは多くの虐殺を行い、私の息子を殺した」。ロナルドの家の近所に住むミリー(50)は声を荒らげた。

父ローレンス(63)は「ここで、彼の新しい土地は探せない。村の年長者たちが嫌っている」と語り、母ビシェンティナ(58)は「彼の兄はLRAに殺された。複雑な心境を抱く人はいる」と、ため息をついた。

両親の話聞きながら、誰とも目を合わせず、大きな家の壁を無表情に見つめていたロナルド。最後に、ひと言だけ口を開いた。

「銃弾の傷が痛くて満足に働けず、家族を支えられなくて申し訳ない」

(敬称略、ウガンダ北部グルで、沢田千秋、写真も)



父ローレンス(左)と決して目を合わせようとしなかったロナルド。子ども兵として13年間の拘束から戻った時、故郷に彼の居場所はなかった



グルの伝統的な家屋「ハット」(手前)の中で、ロナルドの家(奥)は異色の存在だ

＜銃を手にして… ウガンダの子ども兵＞

（3）解放後も盲信 霊力への恐れ、洗脳に利用

ウガンダ北部最大の街グルの市場の一角にクリスティーン(31)が友人と立ち上げた小さな洋裁店「ルバンガ・トゥウェロ」があった。アチョリ語で「神には可能だ」を意味する。

11歳で北部アチョリ人の反政府組織「神の抵抗軍」(LRA)に拉致され、15年後の2013年に解放された。両親は拘束中に死亡。読み書きもできず「自分は役に立たない人間」と自暴自棄だったクリスティーンを日本のNPO「テラ・ルネッサンス」が支援。3年間、洋裁の訓練を受け念願の出店を果たした。

平均月収約50ドル(約5,500円)のウガンダで、クリスティーンは60ドル以上稼ぐ。3年前に結婚し、長男ジェイコブ(1つ)を出産。貯金で家畜のヤギ6頭を手に入れ、「自分の家を建て、息子に教育を受けさせたい」と、現実的な夢を描く。だからこそ、LRAの指導者ジョゼフ・コニーの「霊力」を今も信じていることに、衝撃を受けた。

LRAは、殺害や拷問など恐怖で子ども兵を支配した。同時に、アチョリ人に根強くある神や霊力への恐れを洗脳に使った。コニーは自らを霊媒師と名乗り、「私はアチョリ人を排除する政府から、人々を救うために神から遣わされた。その過程での死や破壊はやむを得ない」と説いた。

コニーの部隊は約80人。クリスティーンは12歳で60歳ほどの司令官と結婚させられ、コニーにも多くの妻子がいた。食事は、密林で採った山芋を煮炊きしたり、銃で仕留めた野生動物を分け合ったりした。

コニーは自らの霊力を「天使」と表したという。クリスティーンは「攻撃的な天使が舞い降りた時、彼は人を殺し、友好的な天使の時は、冗談を飛ばした」と振り返る。

クリスティーンが足が腫れて動けなくなった時、コニーは「魔女の少女兵が魔術を使ったせいだ」と断じ、少女兵を拷問した。クリスティーンも「魔女の仕業」を信じて疑わない。

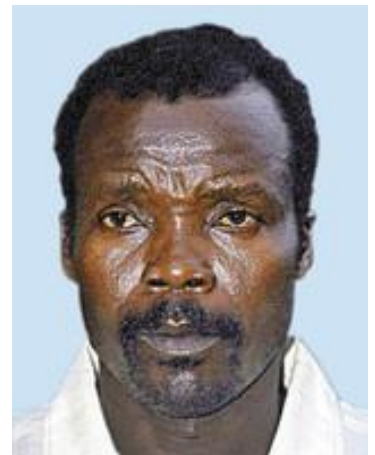
LRAは衛星利用測位システム(GPS)や無線機、パソコンを駆使し、その情報も霊力と偽った。だが、「コニーは政府軍や米軍が来る日をぴたりと予言した。彼の霊力は本物だった」と訴えるクリスティーンの表情は、真剣そのものだった。

2005年、国際刑事裁判所(ICC)は人道に対する罪で、コニーらの逮捕状を取り、国際刑事警察機構(ICPO)が国際手配した。米政府は捜索に特殊部隊を投入。コニーの身柄に500万ドルの懸賞金をかけたが、発見に至らず、昨年5月、計7億8千万ドルかけた作戦は失敗に終わった。ウガンダから逃れたLRAは今も、近隣国の中央アフリカやコンゴ(旧ザイール)で、殺人や拉致を続けている。

(敬称略、ウガンダ北部グルで、沢田千秋)



「神の抵抗軍」(LRA)の指導者ジョゼフ・コニーと行動を共にしたクリスティーンは、日常を取り戻した今も、彼の「霊力」を信じている＝沢田千秋撮影



ジョゼフ・コニー指導者＝ロイター・共同

<銃を手にして… ウガンダの子ども兵>

(4) 石油利権 大国米中の代理戦争

「銃弾は貫通したが、すぐに肉が腐り始め、切断した。政府軍の弾丸に毒が塗られていたんだらう」。右足がない理由を語るチャールズ(45)は、ウガンダ北部アチョリ人の反政府組織「神の抵抗軍」(LRA)の最高幹部の一人だった。

なぜ、一地域の反乱軍にすぎなかったLRAに、約4万人もの子どもの拉致が可能だったのか。チャールズは「スーダンで軍事拠点を得たからだ」と答えた。南スーダン独立前の北部政府は一九九四年からLRAを支援。拉致が本格化した年と重なる。

背景には、アフリカの石油を求める米国、中国という二大国の存在があった。スーダン南部の石油を狙った米国は、親米ウガンダ政府を通じ、スーダン南部の反政府勢力「スーダン人民解放軍」(SPLA)に軍事協力した。これに対し、中国の油田開発を受け入れていた北部政府は、ウガンダ政府への報復として、LRAの後ろ盾となった。



「神の抵抗軍」の幹部として戦い、右足を失ったチャールズは「日本も紛争に加担している」と語った

ウガンダなどの元子ども兵を支援するNPO「テラ・ルネッサンス」の小川真吾理事長は「米国はSPLAを使って北部政府を攻撃し、親米政権化を図ったが、中国が北部政府を支えた。米国は『押しダメなら引き離せ』と、南スーダンの独立を後押しすることで、石油利権の獲得に動いた」と解説する。

LRAはスーダン国境を越えてウガンダ政府軍の追跡をかわし、北部政府の軍事拠点を子ども兵の訓練施設として使うことで、大規模な拉致を可能にした。しかし1999年、北部政府はLRAから手を引くと表明。2004年、スーダンにいたチャールズは、北部政府の協力で攻め込んだウガンダ政府軍に撃たれ、捕らえられた。

「スーダンの支援を受けたら、その先に米国という大きな敵がいた。アチョリ人の結集を目指したLRAは、いつの間にか大国の代理戦争をしていた」。南スーダンは一一年に独立したが、再び内戦状態に陥り、米国に同調する日本は、この地に自衛隊を派遣していた。

LRAが行った子どもの拉致や虐殺を後悔しているか。チャールズは「政府の監視下にあるので、答えられない」と口をつぐみ、代わりに絞り出した。

「資源を求める大国はアフリカの紛争を望んでいる。資源を奪う機会になるからだ。もうアフリカ人の手では止められない。米国に味方するなら、日本もこの紛争に加担している。大国なら、それを止める側に回ってくれないだろうか」(敬称略、ウガンダ北部グルで、沢田千秋、写真も)

